



KANSAI UNIVERSITY

夢・きらめき
豊中っ子



世界を広げてくれた デフテニスとの出会い

喜多美結さん

テニスをしてきた両親の影響で、小学3年生からテニススクールに通い始めた喜多美結さん（22歳、北桜塚）。中学・高校では全国大会に出場するほどの力をつける一方で、テニスを始めたころに診断された難聴と闘っていました。

「聞こえづらさ」は周囲から理解されにくいもの。高校時代には、友人とのコミュニケーションがうまくとれないことで自分の殻に閉じこもってしまうことがあったそうです。大学入学前、テニスを続けるか悩む中で出

合ったのが聴覚障害者のテニス「デフテニス」でした。インターネットで見つけた子ども向けのデフテニス教室にボランティアとして参加すると、そこには生き生きとテニスを楽しむ子どもたちの姿があり、自分と同じ境遇の悩みを共感してくれる人との出会いもありました。そして「テニスを続けたい」という思いが強まり、入学後に思い切って体育会テニス部に入学します。

「関西大学のテニス部はレベルが高く、学業との両立はもちろ

ん、耳が不自由なことで仲間迷惑を掛けてしまわないか不安でした」と当時を振り返りますが、それは取り越し苦労だったようです。部員たちが、どうやって喜多さんが理解できるかを考えて伝え方を変えるなど工夫をしてくれることで、コミュニケーションの不安は減っていききました。デフテニスの練習に付き合ってくれたり、聞こえにくかった講義のノートを貸してくれたり、周囲の支えがテニスも学業も本気で取り組む後押しになりました。

令和元年（2019）に行われた世界デフテニス選手権大会では女子シングルス決勝の舞台に立ちます。対戦相手は前年に負けた選手でしたが、「自分を支えてくれていた人たちに恩返しをしたい」という思いを胸に、得意のフットワークを生かしたプレーで見事勝利を勝ち取りました。この結果によりさまざま賞を受けるようになり、自分の活躍がデフテニスを多くのの人に知ってもらおうきっかけとなることを実感。そして「同じ障害、



Deaf tennis player

Q

デフテニス
通常のテニスと違うところ、
難しいところは？



A

補聴器を外すこと以外、ルールなどは一般のテニスと一緒に。テニスは打球音に反応して動きますが、音を頼りにできないので始めたころは戸惑いました。しかし、視覚に集中することで自分のテニスができるようになってきたと感じています。



※2021年12月に開催予定だった第24回夏季デフリンピック競技大会は、2022年5月に延期になりました

ひいてはさまざまな障害を持つ子どもたちに勇気を与えられたら」と思うようになったそうです。

ハードな練習をこなしながら、デフキッズテニスの指導をし、難聴の原因を探るために選んだという生命・生物工学科では熱心に研究に取り組む。どこまでも突き詰めた性格の喜多さんが、今めざしているのはデフリンピック（聴覚障害者の国際スポーツ大会）で金メダルを獲得すること。他競技の選手たちと

の交流も楽しみにしていると言
い、国際手話も学ぼうと積極的
です。

新型コロナウイルス感染症に
よる活動自粛期間中には、思っ
たように練習や活動ができずに
1人で努力し続けることの難し
さを感じた一方で、多くの支え
や応援を思うと頑張れたそうで
す。「今ある環境に感謝し、成
長を続け、スポーツを通じて社
会に貢献できたら」と大きな志
を語ってくれました。